Eligibility Traces for Off-Policy Policy Evaluation

Precup et al. (2000)

2020/09/27 Tokuma Suzuki @ OPE 勉強会

アジェンダ

- バックグラウンド
- MDP の記法
- importance sampling
- Pre-Decision Algorithm
 - MC method
 - TD method
- Tree Backup Algorithm
- Empirical Comparison

研究の背景

- 強化学習における最大のトレードオフ:探索と活用
 - 貪欲方策を取り続けたいが、他の行動をためさないと最適な方策を見つけられない...
- 最適方策を見つける方法
 - on-policy learning
 - off-policy learning
 - 何らかの方策から生成されたデータで最適方策を学習

現代的モチベーション

- 探索と活用以外にも off-policy learning が必要な場面が存在
 - 別の方策の性能を見積もりたいが、実運用は高コスト...
 - 金銭的コスト
 - 性能が悪くユーザーが離れるリスク
- 現在の方策の下で収集されたデータを用いて異なる方策の性能を評価したい!
 - 最適な方策を探すコストを低下させる事が可能

記法

- *m*: エピソード
- T_m : エピソードmの継続期間
- $s_t \in S$: tにおける状態, Sは有限集合
- $a_t \in A$: tにおける行動, Aは有限集合
- $p_{s,s'}^a$: 状態 s において行動 a を選択した際の状態推移確率
- r_s^a : 状態 s において行動 a を選択した際の利得
- $\pi: S imes A o [0,1]$: 方策

定義

方策πにおける状態行動価値関数

$$Q^{\pi}(s,a) = E_{\pi}[r_1 + \gamma r_2 + \dots + \gamma^{T-1} r_T \mid s_0 = s, a_0 = a]$$

- target policy, π: 評価したい方策
- behavior policy, *b*: データを生成する方策
 - \circ bがソフトである: $b(s,a)>0 \; orall s,a$
- 方策bによって生成されたデータを用いて Q^π を推定する方法を検討

参考: その他の方法との違い

- TD 法: on-policy
 - ある方策のもとでの価値を推定
- Q-learning: off-policy learning
 - **貪欲方策における**価値を推定し最適方策を学習
 - behaivior と target ともに時間を通じて変化
- 提案手法: off-policy policy evaluation
 - **異なる方策における**価値を推定
 - 各方策は不変で最適方策を求めることが主眼ではない

importance sampling

• target, behavior policy が生成するデータの分布の違いを補正

$$egin{align} E_d\{x\} &= \int_x x d(x) dx = \int_x x rac{d(x)}{d'(x)} d'(x) dx \ &= E_{d'} \left\{ x rac{d(x)}{d'(x)}
ight\} \ &pprox rac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i rac{d\left(x_i
ight)}{d'\left(x_i
ight)} \ \end{aligned}$$

• この推定量は consistent かつ unbiased. (Rubinstein, 1981)

Weighted importance sampling

• 重みを考慮することで実用上より高速で安定的に推定可能

$$\circ$$
 重み: $rac{d(x_i)}{d'(x_i)}$

$$rac{\sum_{i=1}^n x_i rac{d(x_i)}{d'(x_i)}}{\sum_{i=1}^n rac{d(x_i)}{d'(x_i)}}$$

- ullet consistent but biased estimator of $E_d[x]$.
- このあたりが IPW に関係してくる?

Estimating Q function

- bの下での状態行動価値関数 Q^b から Q^π を推定したい $Q^b(s,a)=E_b[r_1+\gamma r_2+\cdots+\gamma^{T-1}r_T\mid s_0=s,a_0=a]$
- $Q^{\pi}(s,a)$ ${\mathscr O}$ first-visit importance sampling estimator

$$Q^{IS}(s,a) \ \stackrel{ ext{def}}{=} \ rac{1}{M} \sum_{m=1}^M R_m w_m$$

weighted importance sampling

$$Q^{ISW}(s,a) \stackrel{ ext{def}}{=} rac{\sum_{m=1}^{M} R_m w_m}{\sum_{m=1}^{M} w_m}$$

エピソードを利用した価値推定

- M: (s,a)を訪問したことのあるエピソード数
- $ullet R_m \stackrel{ ext{def}}{=} r_{t_m+1} + \gamma r_{t_m+2} + \ldots + \gamma^{T_m-t_m-1} r_{T_m}$
 - \circ エピソードmでの(s,a)のペアが出現以降の割引現在価値
- $ullet w_m \stackrel{ ext{def}}{=} rac{\pi_{t_m+1}}{b_{t_m+1}} rac{\pi_{t_m+2}}{b_{t_m+2}} \cdots rac{\pi_{T_m}}{b_{T_m-1}}$
 - 。 w_m : importance sampling のウェイト, 方策による選択確率の調整
- t_m : エピソードmにおいて初めて(s,a)を訪問した時刻

より効率的で実装が容易な方法を提案!

Per-Decision Algorithm

- step-by-step に重点サンプリングを実行 → 計算量削減
 - \circ 今期の利得は将来の $\frac{\pi}{b}$ に依存しないことを利用して分散を低下させる

$$Q^{PD}(s,a) \, \stackrel{ ext{def}}{=} \, rac{1}{M} \sum_{m=1}^{M} \sum_{k=1}^{T_m-t_m} \gamma^{k-1} r_{t_m+k} \prod_{i=t_m+1}^{t_m+k-1} rac{\pi_i}{b_i}$$

• 歴史に沿って各利得に重みをつける

Theorem 1

The per-decision importance sampling estimator Q^{PD} is a consistent unbiased estimator of Q^{π} .

Eligibility-Trace version

- TD 法に importance sampling の考え方を利用
- ランダムネスの少ない TD 法を利用するため、更に分散を低下させられる
 - MC: 考慮するすべての時点の利得,行動, 状態遷移に依存
 - TD: 一部の時点の利得,行動, 状態遷移に依存
- 紹介するアルゴリズムは online だが、更新が offline の場合のときに Q^π に確率収束
 - theorem 2 参照
- まずは TD 法と Eligibility-Trace の復習

TD 法

online である方策の下での価値関数を推定

- $Q(s_t, a_t)$: s_t において a_t を選んだときの価値 \leftarrow 更新対象
 - 。bのもとで行動 a_t を選択 ightarrow報酬rと s_{t+1} が決定
 - 。 $Q(s_t,a_t)$ だと思っていたものが実際には $r+\gamma Q(s_{t+1},a_{t+1})$ だった
 - \circ 2つの差は異なる時点での (s_t,a_t) の予測価値の差異!(temporal difference)
 - これを用いて価値を更新していく方法

$$Q(s_t, a_t) \leftarrow (1 - \alpha)Q(s_t, a_t) + \alpha(r_t + Q(s_{t+1}, a_{t+1}))$$

Eligibility Trace(ラフイメージ)

- TD 法は更新幅が少なく,初期値の影響が大きいため効率が良くない
 - heuristic を導入して更新幅を増幅しよう!
- 予測価値の差が生まれた原因について 2 つの heuristic を導入
 - Frequency heuristic: 頻繁に起こるものを重視
 - 。 Recency heuristic: 最近起きたものを重視

厳密でない説明なので興味がある場合は foward-view, backward-view でググって

Algorithm 1

Online, Eligibility-Trace Version of Per-Decision Importance sampling

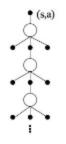
1. 各状態について eligibility trace を更新

$$e_t(s,a) = e_{t-1}(s,a) \underbrace{\gamma \lambda}_{ ext{recency}} \underbrace{\frac{\pi(s_t,a_t)}{b(s_t,a_t)}}_{ ext{importance sampling}}, \ orall s, a$$

- 2. TD 誤差を計算: $\delta_t = r_{t+1} + \gamma rac{\pi(s_t, a_t)}{b(s_t, a_t)} Q_t(s_{t+1}, a_{t+1}) Q_t(s_t, a_t)$
- 3. 行動状態価値関数を更新: $Q_{t+1} = Q_t(s,a) + lpha e_t(s,a) \delta_t ~~orall s,a$

Tree Backup Algorithm

- behavior policy に対して non-starving のみ仮定
 - ある(s,a)に2度と訪問しない時点に決して到達しない
 - 非定常, 非マルコフ, 未知でもよい
- target policy に従いつづけた場合にあり得る可能性をすべて考慮



Tree Backup Algorithm

n-step tree-backup estimator

$$Q_n^{TB}(s,a) = rac{1}{M} \sum_{m=1}^M \gamma^n Q(s_{t_m+n},a_{t_m+n}) \prod_{i=t_m+1}^{t_m+n} \pi_i + \sum_{k=t_m+1}^{t_m+n} \gamma^{k-t_m+1} \prod_{i=t_m+1}^{k-1} \pi_i \left(r_k + \gamma \sum_{a
eq a_k} \pi(s_k,a) Q(s_k,a)
ight)$$
実際にとった行動から得られる価値 取られなかった行動から得られる価値

- importance sampling をしないで済む
- per-decision と同様に eligibility-trace を利用できる

Algorithm 2

Online, Eligibility-Trace Version of Tree Backup

1. 各状態について eligibility trace を更新

$$e_t(s,a) = e_{t-1}(s,a) \underbrace{\gamma \lambda}_{ ext{recency}} \pi(s_t,a_t), \ orall s, a$$
 $e_t(s_a) = 1, ext{ iff } \ t = t_m(s,a)$

- 2. TD 誤差を計算: $\delta_t = r_{t+1} + \gamma \sum_{a \in A} Q(s_{t+1},a) Q(s_t,a_t)$
- 3. 行動状態価値関数を更新: $Q_{t+1} = Q_t(s,a) + lpha e_t(s,a) \delta_t \;\; orall s,a$

オフライン版は Q^π に確率収束(定理 3)

Per-Decision と Tree Backup の違い

- どちらも歴史に依存して価値を更新していくという点では同じ
 - Per-Decision: 実際に起こった利得を用いて更新
 - 。 Tree backup: その時点で起こりうるすべての可能性を考慮
- 実験したところ tree backup のほうが良い性能!
 - バンディットに IPW を適用する話につながるのかこれ?

Empirical Comparison

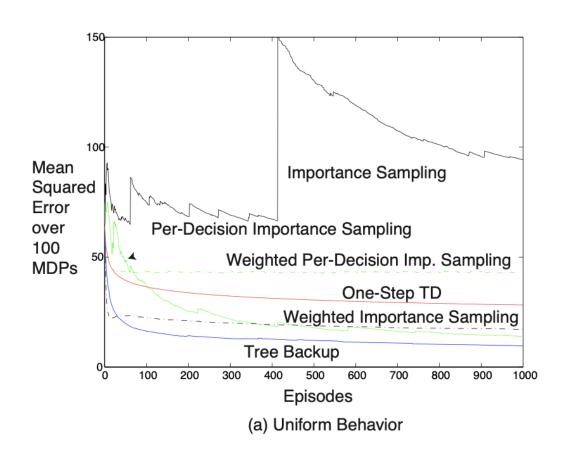
実験設定

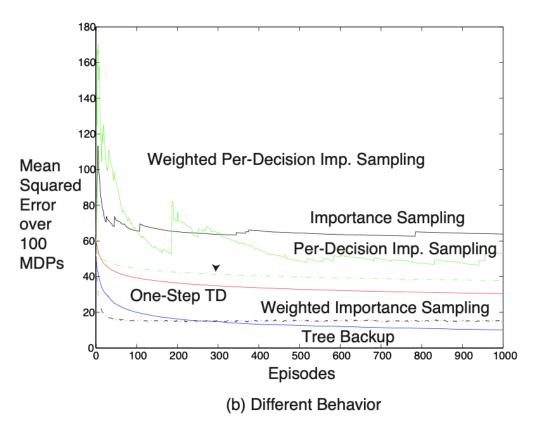
- 各推定方法に対し 100 個の MDP をランダムに生成
- 1 terminal state, 100 nonterminal states
- 2つの行動が存在
 - ランダムに選ばれた 4 つの状態へランダムに移動
- target policy: 1 つめの行動を80%の確率で選択
- behavior policy: 2 種類検討
 - 。 uniform behavior: 半々の確率で選択
 - 。 different behavior: 2 つめの行動を80%の確率で選択

実験設定

- immediate reward: [0,1]から一様にランダムに選ばれる
- 割引率: $\gamma=1$
- 性能評価
 - 。各エピソード終了後各状態-行動ペア, 100 個の MDP の結果を平均
 - 。 真の状態行動価値との mean-square error で評価

結果





結果まとめ

- importance sampling: 収束が遅く、分散が大きい
 - 。 weighted の場合は良い結果
- per-decision importance sampling: behavior policy により異なる
 - weighted の場合は性能悪化
- tree-backup: 中長期的に最も効率的
 - 今回の実験では trace の影響が早く薄れすぎないように正規化している
- 全体的に原因の検討はなされていない